特248
454

日本精神と弘法大師

板勝美述

始

特248
454

日本精神と弘法大師

文學博士　黑板勝美述

本年は弘法大師御誕生後一千百六十四年になりますが、御入定から數へますと滿一千一百一年であります。私共宗教の方面に付て知識を有ちませぬ者に於きましても、大師が日本文化の上に遺された功績は實に感激に堪へぬものが多いのでありまして、今更之を述べる必要もないかと考ふる程大なるものがあり、また國民の信仰を受けておいでになります。今夕私はこゝに教義の方面に於ける大師について申述べようとは思ひません併し現在我が國佛教界を見渡す時、眞言宗諸大德を前に置いて申すのは如何と存じますが、眞言宗はいふまでもなく各宗に於ても果して大師に對し自ら省みて恥づる所ない宗教家が幾人あるでありませうか。私は此意味に於て今日六月十五日と云ふ大師御誕生の

日を殊に私共日本國民と致しましても考へて見なければならない大いなる意義を有するものと信ずるのであります。

私は弘法大師の御事績を考へます場合に、先づ第一に我が日本に佛教をお入れになりました聖德太子の偉大なる御功績を思ひ起さゞるを得ぬのであり、聖德太子と弘法大師此御二方の間に靈犀相通ずるものがあることを觀るのであります。そしてそれは實にこの二大聖が日本精神を以て終始せられたところに大なる共通點があるのであります。尤も今こゝに聖德太子の御事績について委しく御話し申すことは出來ませぬが、太子が佛教を我が日本にお入れになる前に非常に深い御用意深い御準備があつたこと、それだけは先づ順序として述べさせて頂きたい。

太子は外國から新たに佛教が來たからと云つてそれを盲信し心醉されたお方ではなかつたのであります。我が國に佛教が渡來しましたのは太子以前既に五十年を經過してゐます。通說によりますと欽明天皇の御代に百濟から佛教が輸入されたことになつてゐま

すが、その間に當時の人々は尙ほ未だ佛教に對する正確な理解を有してゐなかつたのでありまして、佛教は主として現世信仰としてのみ信ぜられてゐたと申しても過言ではないのであります。しかもそれが政治的の問題と結付いて、佛教は信ずべきや信ずべからざるやと云ふ問題に於て國民の思想は動搖に動搖してゐました。そこに聖德太子がお生れになつた。國民思想を堅實にし日本精神を高揚すると同時に國運の隆昌を企圖するにはどうしても外國文化を輸入して、我が日本文化を樹立して進んで行かねばならない、それには佛教を如何にすべきか。この問題について太子は先づ精神文化の各方面に關する御研究をなさつた。卽ち太子は唯單に佛教のみを百濟の慧聰法師や高麗の慧慈法師に就てお習ひになつたのでなく、儒學は博士の覺哿と云ふ人に就て學習せられた。又法王帝說に記されてゐる所を見ますと、太子は三玄、卽ち老莊の教を研究になりました。それが宗教としては道教なのでありまして、儒教佛教のみならず、道教の研究をもおやりになつたのでありまして、決してたゞ佛教のみを御研究になつたのではなかつた。故に

太子が推古天皇の御代に攝政をなさつた十九年間の御施設や御事蹟を見れば儒教の分子も多く這入つてゐます。道教の分子も這入つてゐます。併し窮極は何か、理想として國民思想を固めるものは何ぞやと言へば、太子は儒教よりも、また道教よりも佛教を採用になり、佛教の中でも大乘佛教を中心となさつたのでありまして、太子は御自身に筆を執つて法華經、勝鬘經及び維摩經の疏卽ち注釋を御書きになりました。日本の佛教は日本人が解釋しなくちやならない、日本の思想で作上げて行かなければならない。印度で出來た佛教、其印度の佛教と云ふものは無論釋迦如來が一切衆生を救ふ爲にお作りになつた教ではありますけれども、釋迦如來そのものが印度の人であり、印度以外の事は知らなかつた。故に釋迦如來の眼に映ずる所の衆生は恐らく印度民族其ものであつたに相違ない。釋迦如來の眼に映じた社會は印度だけの社會であつたに相違ない。釋迦如來の知識は支那或は日本に及んでゐないと云ふことは謂ふまでもない。故に其佛教が東の方に傳はつて來て支那に這入つて來ますと、支那では支那の高僧が佛教を飜譯し之に註釋

を加へたのです。がそれは支那の國民を救ふと云ふ意味に於て佛教を宣傳したのでありその支那人の註釋した佛教が日本に這入つて來たとすれば國體を異にする日本國民が直ちに之によつて救はれるでありませうか。太子の御考では日本には日本の國民思想があり、日本精神がある。日本國民を救ふのには日本と云ふ立場でなくてはならない。申すまでもなく宗教は國家を超越するものでありませう、世界的のものでなければなりますまい。併し國家と調和しなければなりませぬ。國民思想と一緒になつて行かなければ其國民を救ふことは出來ないのであります。

太子は日本の佛教を作上げるのにはどうしても日本の國體日本の國民思想、日本精神そのものゝ上に作上げて行かなければならない。外國思想の上に作上げられた佛教其ものを其まゝ鵜呑みにするのは日本精神ではない。日本と云ふ國はどうして進んで來たかそこに太子は深い理解を以てお進みになつたのが、前に申した三經疏の注釋を御自作になつた所以であり、神祇祭祀を重んずべき詔勅を下され君父の爲めに寺を造らしめられ

た所以でありました。

然るにその後大化の改新以來支那に盛んに起つた新興文明、卽ち唐の文明は恐らく一時世界に於て最も優秀な文明であつた。それを直接に我日本で受けた時代が奈良朝時代でありました。この奈良朝時代の中心は聖武天皇の天平年間であります。そして所謂天平文化を作り上げたとは奈良朝人の努力の結果である。吾々は奈良朝時代を觀察する場合に奈良朝人が如何に大きな考、唯支那の文化を模倣すると云ふやうな考ではなく、眞似ると云ふやうなさもしい態度ではなく、吾々日本人は支那人が作つて居る其當時の最高文明と同樣のものを作上げ得ると云ふ抱負の下に進んだのでありました。故に大佛のやうに大きな佛像が出來て今日遺つて居ります。又東大寺や唐招提寺其他各寺院に遺つて居る奈良朝文化、殊に帝室の御物になつて居る正倉院の御物、それらのものゝ上に吾々は奈良朝人が決して單に模倣的な人間でなかつたことを見ることが出來ます。元來模倣と云ふものは唯表面的のものであつて、如何にも弱々しく力がない。奈良朝の文化はそ

んな力のないものではなかつた。併し支那と同樣にならうと云ふやうな考、其考の上に作上げられた奈良朝文明、其文明には確かに日本といふものを何時か忘れてしまつて聖德太子が佛敎の上に考へられてゐた日本佛敎そのものに對しての自覺をも失つてしまつたのではなかつたらうか。佛敎は初め國家の爲めの佛敎、日本國民の爲めの佛敎、日本の國民を善導し立派に作上げて行く所の精神的の糧、其の意味に於て聖德太子が、お入れになつたものが奈良朝佛敎にはどう云ふやうに現れて居るかと考へる場合に私共時に慄然たらざるを得ないものがあるのであります。（拍手）

卽ち最初聖德太子がお考へになつた所謂國家的の佛敎が却つて奈良朝の末に於ける佛敎的國家の出現を見るやうになつたのであります。此場合に於て日本國體の危機が到來しました。僧道鏡が出たことはどんなに佛敎界の人が辯護致しましても、私は日本の佛敎史に一の汚點を殘したものと考へなければなりませぬ。また學者の中には藤原氏の勢力發展の爲め道鏡が芝居の道具に使はれたのだと云ふやうなことを申すものもあります

が、併し其說がよいとしても道鏡を道具に使ふと云ふことの出來た社會の事相はどうでありませうか。其社會相と云ふものは道鏡の如き僧侶を道具に使つても差支へないやうな、非國體的の國民思想が現はれて居つたが爲に其の芝居が出來たと言はなくてはなりません。確かに奈良朝の佛教は最後に於て腐敗し墮落し折角聖德太子に依つて作上げられた日本的佛教がすつかり姿を變へたやうな狀態になつてゐたのであります。故に我が國民を精神的に救ひ强めると云ふことには、佛教そのものを否定してしまふか。又は國家的佛教としての新佛教を作り出すかの二途より外にないが、さてこれまで擴まつてゐる佛教を禁ずる譯に行かぬ、寧ろ新佛教によつて國家的思想の新空氣を作り出すべきである。そこに先づ御注意になつた御方が平安朝の初めにお立ちになつた桓武天皇であらせられた。桓武天皇は固より一代の英主であらせられます。都を先づ長岡へ、それから京都にお遷しになつて其後千有餘年の間この都を中心として日本の文化が進んで來たこと、又蝦夷を御平定になつて日本の隅々まで皇化に潤ふことになりましたこと、それら

の御事績をも吾々は擧げることが出來ますが、更に精神的に考へまして日本の國民精神の上に我が日本をお救ひになつたのが桓武天皇であらせられる。その桓武天皇に發見せられたお方が弘法大師と傳教大師でありますが、私は今夕傳教大師については姑らく申すことを差控へます。

然らば弘法大師は如何にして桓武天皇に發見せられることになつたのでありませうか又大師が宗教界に入るについてどう云ふ御用意があつたか、どんなに御苦心になつたか私は先づ今日の佛教界の諸君に向つて此點を第一にお考へにならんことを願ひたいのであります。大師は決して生れながらにして大師ではなかつたのであります。生れながらにして眞言宗の祖師になられたのではありませぬ。眞言宗を我が國に開かるゝまでには非常な御苦行、御修行があつたのです。そこに大師の偉大なる所以があると思ひます、私は今それを詳しく申しませぬでも眞言宗のお方はよく御承知であらうと思ひます。大師の御遺告に依つて見ましても、或はまた三教指歸の序文に依つて見ましても、其他大

師の御傳について見ましても大師は御幼少の時から色々學問をなさつたのであります。尤も後から見ますと、大師は生れながらにして非常な才子、非常な天才であつたやうにいろ〳〵の書に見えてゐますが、是は有勝のことです。すべて偉人の傳には何時でも幼少の時から非常に偉かつたやうに書くものです。その人が偉くなると、幼少時代の詰らぬことでも、それが非常に偉いやうに見えるものです。聖德太子の如きも生れながらにしてよく物を言はれたと日本書記には書いてあります。生れてすぐ物の言へるやうなことは有り得べからざることでありますけれども、聖德太子の偉いと云ふことを申す爲めに、さう云ふやうな傳が出來たのでありませう。弘法大師にも色々幼少の時の逸話が出來て居ります。私はそれが事實であるか事實でないかと云ふことを此處に申すのではありませぬが、縱へ大師が非常に英才であらせられても、大師は決して自ら其英才を誇られなかつたのみならず、一生懸命に御修行になつたことだけは確であります。

第一に私が大師に感服致しますのは、無論大師の親戚にも偉い方があつたのではありますが、大師が佛教を研究するについて、先づその以前に儒學や道教を大に研究しなされたことであります。大師の御傳或は御遺告等に傳ふる所に依りますと、大師のお母樣の弟に阿刀の大足と云ふ方があります。即ち大師の叔父に當る人で、京都に居られて伊豫親王と云ふ御方の學問の先生であつた。ところが大師は小さい時から如何にも佛教に對する趣味を有つて居られて坊さんになりたいと思つて居られた。尤も傳記の傳ふる所に依りますと、大師は印度の坊さんがお母樣の胎内にお這入りになつたといふ夢を見てお生れになつたとまで傳へられて居るのでありますから、小さい時から幾らか外の子供とは變つて居られたには相違ないでせうが、さりとて最初から佛教研究の前程として儒學などをなされたか、それは多少問題となるにしても、先づ學問が必要だと云ふので、叔父の阿刀大足が、京都に來て學問を勉强したらよいと大師に奬めました。それで大師は大學にもお這りになつた。丁度十五の歳に讃岐の國からお出かけになりましてそして京都で學問をなすつた。其の先生には大學の直講であつた味酒淨成、また名は分りませ

ぬが岡田博士と云ふ學者に就いて支那の歴史、又儒教の書などをお讀みになつたのであるが、同時にまた佛教をも研究された。さうして其間に大師はどうも今大學で習つて居る所のものは古い時代の俗教である、眼前の問題こそ或はそれによつて解決することが出來ようが眼前の問題にも或はそれを利用することが出來ないこともある。況んや一期の後永久の生命について尚ほ考へる所がなければならないとすれば、眞の福田とはどうも外にある。さう云ふ意味に於て佛教の研究を段々進められたのでありますが、こゝに大師に一つの煩悶があつたやうであります。

其煩悶は何かと申せば、果して佛教なるものが果して日本國民に善いか惡いかと云ふことであります。日本國民は國體の上からも第一に忠孝を考へなければならない。君に對して忠、親に對して孝、そしてこの忠と孝とが一致しなければ眞の忠孝ではない、この忠孝を若し吾々が一日でも忘れるならば、日本國民としての存在は許されないのであります。從つて忠孝を說く所の儒教を捨てゝ佛教に這入つて行くことが日本國民としていかどうか。それについての大師自身の解決は終に一大名文となつて三教指歸と云ふ著述となつてこゝに現はれたのであります。

尚ほ後に三教指歸に付ては私の考を申したいのでありますが、此の三教指歸の出來ました時代に付ては多少はつきりしないところがないではありません。或はこの三教指歸は大師十八歳、延曆十年にお作りになつたと云つて居りますが、流布本の三教指歸を讀んで見ますと、大師二十四歳の年、延曆十六年の序文が載つて居ります。そこで始めは聾瞽指歸と云ふものを延曆十年にお作りになつて、後に同十六年にそれを多少修正されて三教指歸と改められると云ふやうな說も出て來るのでありますが、兎に角この六年間の相異が問題となるのでありまして、吾々の考へやうも相當また變つて參ります。それはどう云ふとかと申しますと、二十四歳にお作りになつたと云ふ三教指歸の序文に依りますと、其間に非常に佛教に對する苦行もなすつてお出になる。阿波の大龍の山にお這入りになつたり、或は土佐の室戸岬に行つて御修行なさつたりしたことが、三教指歸の

出來ます以前になるのですが、延曆十年御年十八歳の年でありますと、室戸岬や大龍の方にお出になるのは三教指歸を作られた後のことになりますが、私は大師が佛教をも相當によく研究し體驗せられてからでなければ佛教を儒教以上に忠孝の道に合ふとは斷定出來ぬのではないかと考へます。しかし三教指歸には大師がまだ優婆塞でありますから少くとも東大寺戒壇院で受戒以前であります。しかも大師が佛教を御研究になつたのは決して普通人の勉强の仕方でなかつたと、私は大師御自身の言葉に依つても證明することが出來ると思ひます。

それは前に述べた三教指歸の序文に書いて居られる。卽ち十八歳で京都に出で、螢雪錐繩苦學をなさつて居らるゝと、或る僧が虛空藏求聞持法といふものを賜つた、この僧は或傳には大師の師僧であつた勤操僧都になつて居りますが、これは兎に角として、其經に、若し法によつて此眞言を一百萬遍誦むと、一切經法文の文義を暗記することが出來ると說いてあるので、大師はこの大聖の誠言を信じ、一生懸命になつて修行を始めら

れ、或は阿波の大龍嶽に登つたり、或は土佐の室戸岬に修行したりして之を誦せられたと書いて居られます。

大師が高野山に金剛峯寺をお建てになつたのは弘仁七年のことでありますが、その事を嵯峨天皇に願ひ出でられた上表文の中に、大師が少年の日山水を涉覽することを好んで大和の吉野から南の方へ一日ほど進んで行つた。そして更に二日ほど西の方へ行つたところ、山の中に平原があつて如何にも幽靜の地であつた、そこが高野と申す處であります。四面に高い嶺があつて人跡の絕えたところ、此の地こそは尤も修禪に宜しいところであるから、どうかお願ひ致したいといつて居られます。普通には大師が支那からお歸りになりました時に海上から三鈷をお投げになつた。その三鈷の留まつたところが高野山であると、云ふやうな因緣談も出來て居るのでありますが、少くとも大師は其の以前に實地を御覽になり、高野山をば既に此處こそは將來眞言宗を弘めて行く最も好い場所であるとお認めになつたのであります。現在こそケーブル・カーあり電車あり、一日で京

都から往復も出來ませうが、今から一千百餘年以前に於てあの山中人跡の絶えた隔絶した聖域を御發見になつたことは大師の山嶽修行をなされて如何に困難されたかを證明するものであります。これについては大師が寒い時に藤の衣を着て寒さを凌ぎ炎熱の時にも殆んど米穀を斷つて修行をした、と書いてお出になる。それ位ひの苦行、難行、御勉强でありました。其の間に佛教に對する色々の知識、色々の學問をなすつた。今日の佛教界の人々で果して大師のやうに難行苦行を爲さる方が幾人ありませうか。小學校を出づれば中學校がある、或は專門學校がある、大學がある、無論加行と云ふやうなこともありませう。或る修法を爲さるのに傳授といふこともありませう。しかし大師の難行苦行に比ぶれば物の數でもありません。はつきりしたことを私は申すことが出來ませぬが少くとも大師が、是も多少異說はありますけれども、東大寺の戒壇院で受戒をなすつたと云ふ延曆十四年卽ち二十二歲の年、縱し三敎指歸を十八歲でお作りになつたと假りに致しまして、また今申しましたやうに延曆十六年にそれを多少御修正をなすつたと考へて置いて、大師の入定になつた時の遺告を見ますと、三敎指歸をお作りになつてからその直後に阿波の大龍のとや土佐の室戸岬のことが出て居り、少くとも四年の歲月の後に二十二歲で東大寺で受戒され、空海と云ふ名をお貰ひになつた。尤も三敎指歸をお作りになつた時にはまだ優婆塞であり、無空と云ふ名であつた。それから後に和泉の槇尾寺で出家せられて敎海と云ふ名になり、それから如空と云ふお名前になられ、愈々東大寺の戒壇院で受戒をなすつた時に空海と云ふお名が出來て居る。少くとも是れまで十八歲から二十二歲までの四年間は修行時代でありました。大師が受戒をお受けになつた後も無論御勉强になり、又御勉强になりたいと云ふお積りで支那の方にもお出になつたんでありますが、此の四年の間、大師の生涯の間に殆んど何も御事蹟が傳はつてゐませんが此の四年間の難行苦行、苦學です。繰反して申しますが、果して今日の佛敎界の人々に大師のやうな苦行難行をした人が幾人ありませう。或は敎育の機關が出來過ぎて居る。敎育の機關が出來てゐるのは宜しいけれども本當に佛敎家となつて自分自身と云ふもの

を殺してしまつてさうして社會の衆生を助けるにはそれだけの難行をしなければ私は出來ないと思ひます。唯少しばかりお經を讀んで、少しばかり學問をしてそれで一寺の住職になつただけでどうして國民を濟度し立派な社會を作り上げて行くことが出來ませう我が佛教界の現狀から申しましても、少くとも大師に對し教界のお方はもつと〳〵苦行難行をなさらなくてはいけないと思ひます。（拍手）。大師の大師たる所以、眞言宗の祖師として日本宗教界の恩人として偉大なる所以はこゝに出發するのであります。また是は宗教界の方々だけに申すのではありませぬ。日本國民全體が果して大師のやうに自ら難行苦行をする氣持でありませうか。一生懸命になつて自分と云ふものを捨てゝ勉强する。此氣持に全日本國民がならなければこの非常時にあつて日本國は救はれないのであります。（拍手）

以上大師について述べましたことは、或る點まで聖德太子もさうであらせられたと思ひます。聖德太子の御學問の廣いこと、御苦學になつたこと、恐らく太子の御精神が大師に傳はり、大師は太子を模範としてお出になつたではないか。今日河內の磯長の叡福寺に聖德太子のお墓がありますが、其のお墓を明治維新まで守護し奉つたのは眞言宗のお寺である叡福寺であります。そこに太子と大師との間にまた結び付けらるゝ因緣があると私は信じます。（拍手）併し今一つ私は弘法大師に對して此際大いに感謝しなければならぬ、又吾々が學ばなければならぬものがあります。それは元來日本精神と云ふものはどこに在るかと云へば、色々日本精神の現れはありませうが、國際的にも對外平等であり、また外國文化の攝取同化と云ふことであります。それについて少しく此處に申してみたいのであります。

元來我が日本國民は決して外國に對して排他的な考を有つてゐないのであります。我々が我々の社會を作つてゐるのは共存共榮です、お互ひに一緒になつて行かうぢやないかと云ふことが縱にも橫にも充ち滿ちて初めて我が日本と云ふ國は出來て居るのです。縱と申しますと卽ち畏多いことではありますが、御歷代の天皇は國民と共に榮えようと

云ふお考です。吾々國民は斯う云ふ萬世無窮の皇室の下に榮えて行かうと云ふ考です。横と申しますと、吾々國民同志がみんな一緒に進んで行かなくてはいけない、自分だけが榮えるのではいけない、他人はどうなつても構はないと云ふ、さう云ふ排他的な、申さば生存競爭の思想の上には我が日本は出來てゐないのであります。我が日本國は外國から何が特有かと申しますと、我が尊嚴なる皇室を萬世無窮に上に戴いて居ると云ふことです。それは要するに御歷代の天皇が何時も國民の上に有難い大御心を注がせられてお出でになるからであつて、此の共存共榮の思想は天壤無窮子孫可王の天照大神の御神勅に先づ現れて居ります。天壤無窮に我が皇孫が葦原中津國をしろしめせ、といふ御神勅は卽ち吾々國民が榮え日本の國が榮えなくては意味を成さぬのであります。此の共存共榮が横の方になりますと、それは第一に吾々日本國民が共存共榮でなくてはならず、猶ほ之を擴大して、世界中のものがみんな共存共榮でなくてはいけぬと云ふ思想であります。聖德太子の十七條憲法の第一條に「和を以て貴しとなす」とありますのは平和と云ふことが日本國を進めて行く根本であり、また理想である、現在歐羅巴人や亞米利加人が平和主義を論じてゐても、それは鬪爭の後の平和であり、我が國では肇國以來の平和であり、それが聖德太子の憲法に現れてゐるのであります。

從つて我が國民は外國人に對しても實に寬容であり、外國の文化に對しても決してそれを卑めない。出來るだけ善いものを取つて自國の文化を進めようとしてゐるのであります。明治維新前德川時代の末に攘夷論が盛んに起つて來ましたが、その攘夷論は實に對外平等と云ふ主張に他ならなかつたのです。水戸烈公或は藤田東湖の攘夷論を讀んで見ますと如何にも外國人が日本を劣等な國として脅迫的に開港を迫つて來る。それで若し開港に應じたならば日本はどうなるか。どうしても一遍彼等をやつつけてからでなければ開港は出來ないと云ふのがその本旨でありました。畢竟するに對外平等と云ふことは何れの國民から見ても一の眞理だと思ひます。國際的に考へて總てが對外平等でなければいけないのであります。（拍手）

この意味に於て吾々日本人は進んで來て居ります。故に大師が延暦二十三年に遣唐大使藤原葛野麿に從つて支那に參りました時に、暴風に遭ひまして傳敎大師の船は明州と云ふ所に着きました。今の寧波（ニイポー）であります。大師と藤原葛野麿の船はずつと南の方へ行つて福州の海岸に着きました。さうすると福州の觀察使が、何か日本國の使と云ふ證據を有つて居るかと申しました時に、大師が葛野麿に代つて福州の觀察使に與へた書が性靈集に載つて居ります。それを見ますと如何にも辭令が巧みに書いてあります。大師のことですから外交的に如何にも旨い漢文で書いてあります。旨く書いてありますけれども其內容には實に儼として侵すべからざるものがあります。それは元來支那が日本を待遇して居るのは他の國々とはすつかり異つて居る。他國の使は支那の朝廷に出でゝも直接に皇帝に面會することが出來ないのだが、日本國の使は昔から支那の天子に會つて來て居るのだと述べた後に、また竹符銅契のやうな使節としての證據を持つて行くのは元來惡いことをするからである、若し惡いとさへしなければそんな證據は要らぬことだ。

古い時代から我が日本國はお前の國と國際的關係をよく結んで來て居るが、今日まで國書と云ふものを持つて來てゐないのだ。元來日本からの使節は皆立派な人物だ、天皇の腹心ともいふべき人を擇んで使節に任ぜられてゐる。それにどうして印契などの必要があらう、元來我が國は禮義の鄉、君子の國である、それに何か證據がないかといはるゝのは役人としては尤のことであるが、まだこれまでの事を御存じないのだと、大師は堂々と論じて居られます。卽ち大師は此の場合に於てまた聖德太子が對外平等の上に隋と國際關係をお開きになつたのと同じやうな心持でこの書狀をお書きになつて居る。さう云ふことを考へて見て私はどうも弘法大師の御事績と聖德太子の御事績とには結び付けて考へなければならないことが多いと思ひます。

それから大師は靑龍寺の惠果和尙にお會ひになつて忽ち其門下生の中で第一の高足となられ、二年ばかり支那に御滯在になつたのでありますが、其の間の御勉强と云ふものが亦實に偉い。三十帖策子、今仁和寺の寶物となつてゐます三十帖策子をはじめ、眞言宗

に關する色々のものを持つて日本に歸られましたが、その請來目錄は今に傳はつてゐます。この三十帖策子は醍醐天皇の宸記には、大師と橘逸勢二人のお書きになつたものと傳へられてゐますが、實際は其以外の手もあるやうであります。其三十帖策子は眞言宗に關する色々の祕密大事な經疏など大師が集められたもので、その中には大師の御眞蹟が大分多いのでありますが、其の當時支那の人も非常に感服致しましたやうに、大師は書道に於て實に優れたお方でありました。さうして支那人が一番敬服致しましたものは梵文卽ち悉曇でありました。大師が支那からお歸りになる時に朱千乘と云ふ人が送別の詩を送つて居ります中にも、殊に梵文が旨かつたことが書いてあります。しかも大師の筆は單なる支那人の摸倣ではなかつたのであります、多くの法帖筆蹟などを集めていろ〳〵研究せられて大成されたのであつて、我が國で大師を書道の祖とする所以はこゝにあるのであります。

又文書に至つては既に三敎指歸に於てその名文たるを見るのでありますが、しかし大師は書道と同樣に、我が國で研究されただけでは、やつぱり甘んじられなかつた。支那に留學中も文章學を研究して之を集成し、出來上つたものが卽ち文鏡祕府論と云ふ書であります。支那では唐時代の文章學に關係した善いものが現在殆んどなくなつてゐます大師の文鏡祕府論こそその研究に唯一無二の參考書といつてよいのであります。

かやうに大師は支那に行つてもたゞ眞言宗だけを御研究になつたのではない。當時の支那の學問、文章學、また書道などを日本に移してしまはう。また之を日本のものにしよう。況んや眞言宗其ものに於てをやで、大師はこの一大抱負を以て支那に出かけられたのであります。惠果和尙も大師を見て、汝を待つこと久し、と言はれた程で、恐らく大師に遇つて吃驚されたんであらうと思ひます。

其眞摯な熱心さ、それに加へて頭腦の明晰さ、惠果和尙の門弟にも眞言宗の名僧がありましたが、一人も大師に肩を比べるものがない。そして終に大師は眞言宗の第八祖となられ、眞言宗の正統が日本に來てしまつて、支那の眞言宗は傍系になつたのでありま

す。さうして惠果和尚の亡くなられた時に其の碑文は誰が書いたかと申しますと矢張り大師でありました。しかもその碑文に又大師の理想が書かれて居りその理想に惠果和尚と靈犀相通ずるものがあつたと思はれます。それは何かと云へば、大師が日本精神を以て眞言宗を我が國に持つて來ることに付て惠果和尚と意見が相合するものあつたと云ふことです。卽ちこの碑文の書出しに先づ言つて居られるのが忠孝論であります。支那人しかも宗教家の碑文の初めに忠孝を論ずると云ふやうなことはそこに何等かの意義を吾々は考へざるを得ないのであります。

「俗の尊ぶ所のものや五常、道の重んずる所のものや三明、惟れ忠・惟れ孝、金版に彫聲す、其の德天の如し、盍んぞ石室に藏せざらんや」此數句を惠果和尚の碑文の冒頭に書いたばかりでなく、和尚の言として、また、人の貴きものは國王に過ぎず、法の最なるものは密藏に如かずと、國王と眞言宗との事について述べ、終りに惠果と大師との關係を述べて師資の間如何に親しかりしかを記したものであります。

大師が前に書かれた三教指歸に於て忠を行ひ孝を行ふことに付て儒教が善いか道教がよいか、また佛教が善いかと云ふ比較論をして見られたのです。さうして最後に儒教も忠を論じ孝を論ずる教ではあるが併しまだそれは單に眼前の忠であり孝である。例へば泰伯と云ふ人が夷の國に行つてしまつた。そんなことは忠でもなければ孝でもないやうに見えるが、其泰伯は今日まで偉い人だと云ふことになつて居るではないか。忠孝には儒教から見た以上のものがなくてはならぬ。又釋迦如來の前生でありますが、詰り薩埵が自分の身體を虎に喰はすと云ふことは親に對して不孝ぢやないか。身體髮膚之を傷けざるは孝の始めなり。併しその釋尊は遂にあれだけの衆生をお救ひになる偉人になつて居られる。儒教の忠や孝は小さいものだ。又道教に於ては成程不死の術があり、長生の藥などを造る、如何にも長生きして人生は幸福であるといふ、併したゞ長生きすることが世の中にどれだけ宜いことであらうか、生きるものは必ず滅ぶのである、さう云ふ理窟の分らないやうなことで果して此の社會に生きて行くことが出來るか、吾々はどうして

も現世ばかりでなく死後の問題、永久の問題、それに對して考へてこそ始めて忠を行ひ孝を行ふ所以が知られる。眼前の忠、眼前の孝で滿足することは出來ない。日本の將來永久の先の先まで考へて行くならば、初めて日本國民として眞に徹底したる忠孝の臣民となるのではないか。（拍手）

私は大師の結論について今こゝに批判しようとは思ひませぬ。けれども大師はこの意味で佛教といふものを研究せられた。其の佛教は生きた佛教であり、その佛教に依つて忠孝を教へ忠孝を行ふのだと申されてゐるのであります。果して現在の佛教は大師の御考へになつてゐるやうな佛教でありませうか。現在の佛教では私にはどうも駄目だと思はれます。もつと生々とした力强いものがあつてこそ初めて日本の忠、日本の孝と云ふものを國民に作り上げしむることが出來るのであります。そこに大師に對し吾々は感激を深くするものがあると申さねばなりませぬ。

吾々は大師の唱へられた忠孝に就て考へてこそ、そこに佛教と云ふもの、殊に眞言宗と云ふものに大きな力があるのであります。少くとも私は奈良朝佛教の腐敗衰頽から力ある平安朝佛教、その一半に從し天台宗が之を引受けることが出來るにしましても、少くとも他の一半は大師の功績であり、そこに日本の文化を作り上げられたものである。さうして今日まで佛教が段々日本の佛教として活きるとになつて來たのであります。けれども其の佛教が大師の精神、大師の努力そのものを失つた佛教であれば、私は恐らく大師の御心に反くものだと思ひます。如何に大師の降誕會に色々の儀式を行ひましても大師は決してお喜びにならないと思ひます。大師の御入定後一千百年、茲に莞爾として我が佛教界を御覽になるやうにするのにはどうしても佛教界にもつと自覺した、もつと力强い、もつと自ら省みて自ら働く努力家がなくてはなりませぬ。現在のやうにいろいろ擬似的の宗教に跋扈されて、さうして指を喰はへて見てゐるやうでは佛教もだん〳〵死んで行くのではありますまいか。唯今藤村門跡は弘法大師が後世の衆生を救はれ攝化されると云ふことに付て高野山の例をお引きになりましたが、高野山も一の橋から奥の

院までの高野山は恐らく藤村門跡の仰せられた通りでありませう。併し一の橋からこつちの方で果してどれだけの人々を高野山のお方々が教化されつゝあるか私は疑はざるを得ないのです。（拍手）

私は高野山に對する一の同情者と致しまして根本大塔の建設等にも些か微力を盡して居ります。併し私は其の根本大塔が實に大師の偉大さを示すものであると同時にこの根本大塔を活かして貰ひたいのであります。根本大塔そのものに包まれてゐる偉大なる精神、大師が國家的日本的精神の上に作られた其の精神を、高野山が中心となつて更に國民の間に之を作上げて貰ひたいのです。高野山ばかりでなく大師の教義を奉じてお出になる諸高德に向つてまた青年僧諸師に向つて殊に私は御願ひいたしたいのであります。

私は今少し大師の御事蹟に付て申上げたい積りで材料だけは持つて參りましたけれども、最早十時半になつたやうでありますから今日は是だけで御免蒙ります。私はさきにも申しましたやうに大師のこのお生れになつた六月十五日と云ふ日を記念日となされるならば其の記念日を活かして貰ひたい、もつと自覺して貰ひたい、同時に國際的に難かしい此の時代に於て吾々國民は總て弘法大師となつて一生懸命に苦行難行をする。一千百年後までも後世から慕はれるやうなものになると云ふ氣持で以て一生懸命に自己を忘れて進んで行くと云ふことでなければ、大師の降誕會を祝ふ意義がないと信ずるのであります。（拍手）

（以上は昭和十一年六月十五日弘法大師降誕奉祝講演會に東京帝國大學名譽教授文學博士黑板勝美先生が京都朝日會館に於て獅子吼された講演の速記であります）

325
520

昭和十一年十一月七日印刷
昭和十一年十一月十日發行

著者　黑板勝美

發行者　京都市下京區猪熊通八條上ル　松本隆寛

印刷所　京都市下京區猪熊通八條上ル　六大新報社印刷部

發行所　京都市下京區猪熊通八條上ル　六大新報社
振替京都二九四五番
電話下三八一六番

不許複製

終